

✓「今までと違う」と感じたら…

仕事上の変化

- ☐ 作業に手間取る、ミスが目立つようになる
- ☐ 段取りが悪くなり、優先順位がわからない
- ☐ 指示されたことが理解できない
- ☐ 取引先の相手の名前が覚えられない
- ☐ 約束を忘れてしまう、忘れ物が増える

など

生活上の変化

- ☐ 財布や鍵をどこに置いたかわからなくなる
- ☐ お金の計算や漢字の読み方がわからなくなる
- ☐ 知っているはずの場所で道に迷ってしまう
- ☐ 身だしなみに無頓着になる
- ☐ 車の運転が危ない

など



まずは
ご相談ください

相談無料

秘密厳守

匿名可能

若年性認知症 相談窓口
(岩手医科大学附属病院内)

☎ 019-611-8030
(直通) 月～金 10:00～16:00

※「若年性認知症支援コーディネーター」が就労も含めた
各種相談に応じます。

※家族、職場の方や知人など、どなたでも相談できます。

〔お問い合わせ先〕

岩手県保健福祉部長寿社会課

TEL:019-629-5432 / FAX:019-629-5439

ご存じですか？
若年性認知症のこと。

若年性認知症とは…

認知症は、高齢者でなくとも発症する場合があります。65歳未満で症状が見られる認知症疾患を総称して「若年性認知症」と言います。

仕事でミスが多くなる、家事を面倒に感じるようになる、目的地にたどり着けなくなるなど、周囲が異変に気づくことも多いのが特徴です。

Aさんの例

50代前半の男性。会社勤務。妻と息子との3人暮らし。2年前から、書類の不備など仕事のミスが増えました。最近、人事異動となりましたが、新しい業務が覚えられず、上司から勧められて、専門医療機関を受診しました。

検査の結果、軽度の記憶障害があると言われ、定期的に通院するようになりました。

本人と主治医、相談員、家族、職場の人で話し合い、工夫しながら仕事を続けています。

Bさんの例

50代後半の女性。専業主婦。夫と2人暮らし。

4年前から会話の中に「あれ」「これ」が多くなり、最近になって物の名前が出てこない、計算や読み書きがうまくできないことが続き、専門医療機関を受診しました。検査の結果、失語が目立つ認知症の疑いがあると言われました。

病院に定期的に通いながら、苦手なことはできるだけ夫がサポートし、得意な家事をしながら生活しています。

※架空の事例です。

どんな検査をしますか？

もの忘れは様々な原因で起こりますが、中には治療で改善するものもあります。

若年性認知症は、疲れや更年期障害、抑うつ状態などと症状が似ていることから、受診まで時間がかかってしまうことが多いと言われています。

認知症が疑われる場合は、認知症の専門医療機関を受診し、検査を受けることをお勧めします。

■問診

最初に気づいた症状や時期、今までの経過、日常生活の様子、かかりつけ医の有無、他の疾患の有無、服用している薬の内容、家族歴などを詳しくお聞きします。

メモなどに書いて整理しておくといでしょう。

■画像検査

脳の見た目上の変化の有無を確認するためにCTやMRIを撮ります。また、脳血流検査など、脳の働きを調べる検査を行います。

■認知機能検査

質問に答えたり、作業をしたりする検査です。記憶力や判断力などを調べます。

■その他の検査

認知症の原因となる病気や、認知症に似た症状をおこす病気の有無を確認するために、内科の診察や血液検査などを行います。

受診する必要があるか、どの診療科を受診したらよいかなどわからないことがある場合は、岩手県基幹型認知症疾患医療センターの電話相談（裏面に記載）をご利用ください。

診断を受けたら・・・

1. 定期的に病院に通う

困っていることや気になっていることを相談し、できること・苦手なことを定期的に評価することで、生活の仕方や対応について一緒に考えていくことができます。

認知症の種類によっては、病気の急な進行を抑える薬があります。

2. 公的制度やサービスを利用する

病気のために仕事を辞めざるを得ない場合や生活に支障が出ている場合など、利用できる社会保障制度があります。

■障害年金

症状の程度により、利用できる可能性があります。利用にはいくつか条件があります。

■自立支援医療

外来での医療費が軽減される場合があります。

■介護保険

一定の要件に該当する方は、65歳未満の方でも、介護保険サービスが利用できます。各市町村の地域包括支援センターなどが相談などの窓口になります。

■その他

傷病手当、ジョブコーチ、精神保健福祉手帳など

3. 交流の機会を持つ

認知症の本人や介護する家族が同じ境遇の人達と交流を深め、気持ちの負担を軽減するために、生活と介護の両立を支援する団体が各地で活動を行っています。交流の場としてのカフェやサロンの開催のほか、情報誌の発行などを行っています。

本人もその周囲の人たちも、どのような病気なのかを正しく知ること、日々の過ごし方や周囲の人達の関わり方を考え工夫すること、必要に応じて公的制度を利用していくことなどが、病気と上手に付き合っていくことにつながります。